

5－6					
主題	「関わりの記録」が育む個別ケアと入居者さま理解の深化				
副題	些細な情報を価値ある情報として活かす組織文化へ				
キーワード 1	関わりの記録	キーワード 2	個別ケア	研究(実践)期間	30 ヶ月

法人名	社福) ほうえい会	事業所名	特別養護老人ホーム 栄光の杜
発表者(職種)	藤野愛弓(フロアリーダー)、河合えま(介護職員)		
共同研究(実践)者	西鮎美(フロアリーダー)、樽優(フロアリーダー)、石間陽花(介護職員)、他		

電 話	042-597-1536	FAX	042-597-1920
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	栄光の杜は、平成 8 年に開設した従来型：定員 120 名の特別養護老人ホームです。法人理念である「皆さまの尊厳を守りその人らしく生活が送れるよう支援する」を体現すべく日々のケアに精進するとともに、地域に根差した社会資源としての役割を全うしていきます。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

会議やミーティングで入居者さまの情報共有する際、食事や排泄などの ADL 情報は介護記録として蓄積されていた一方で、日頃の些細な関わりを記録に残すことができておらず、口頭で共有されることが中心であった。

ただ、その些細な関わりから得られた情報にこそ、ケアの個別性を高める根拠があり、その方らしい暮らしが送れるよう支援するヒントがあると感じていた。また、ご家族にも共有していきたいとの思いがあった。ここに、組織全体で入居者さま理解を深める仕組みが課題となっていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

日常の関わりから得られた情報を記録として蓄積・共有化することで、入居者さま理解の深化と個別ケアの推進につながるのではないかと考えた。また、ご家族にも共有させていただき、様々なことを断念されていたご家族を巻き込んだ支援ができるのではないかと考えた。

合わせて以下の効果が期待できると考え仮説を立てた。

- ・ 普段の関わりにこそ価値があることを共通認識し、入居者さま本来の姿へ再アプローチする
- ・ 関わりの記録を積み重ねることで、根拠あるケアが生まれる

《3. 具体的な取り組みの内容》

令和 5 年 12 月より、日常の関わりを記録するツールとして、介護ソフトのケース記録上に「関わりの記録」のカテゴリーをアップデートし記録化を開始した。運用するにあたり周知したことで、記録する内容を「入居者さまとの関わりの中でその方らしさを感じた」「ご本人のニーズ(希望)が聞かれた」「ACP につながる」とし、ご家族や他職員にも共有したいこと、日々の入居者さまとの関わりの結果を記録しケアに活用することを実施した。

令和 6 年度は、入居者さまと接する介助場面を「その方を知る場面」としてとらえることを周

知、関わり記録の認識が図れているか試行錯誤しながら、介護主任、リーダー層を中心に関わりの言語化に取り組みを行った。

令和 7 年度は記録件数の多い職員をピックアップし、記録が多くできているノウハウの伝達、実践につながった個別ケア事例の共有、ケアの見直しにつながった事例など、定期的な会議の場で報告を行った。

《4. 取り組みの結果》

・「関わりの記録」は令和 6 年度約 670 件、令和 7 年度約 2,800 件と増加した。また、記録を活用した事例共有が進み、職員間で入居者さま理解を共有する機会が増えた。その結果、個別ケアの実践場面が確認できた。

・入居者さま、ご家族の希望を把握できたことによる個別外出支援や、生活歴、強みを活かした役割・活動の提供へとつながった。また、職員間での情報の共有化が定着したことで、活気や意欲向上につながるより個別性の高い意図的な関わりが実践でき、みんなが笑顔で過ごす時間、日常生活の中に溶け込む個別ケアが増えた。

《5. 考察、まとめ》

本実践により、日常の関わりから得られた情報を記録として残し共有する仕組みが定着した。これまで職員個々人の経験として留まりやすかった入居者さまの情報が、組織全体で活用できる知識へと変化したことで、入居者さま理解の深化と個別ケアの推進につながった。

効果的だったのは、介護主任・リーダー層への意識的な働きかけと、記録件数の多い職員のノウハウを組織内で共有する仕組みの導入、そして好事例を定期会議で報告する場の設定である。個人の実践知を組織知へと変換するアプローチが、入居者さま理解を深め、個別ケアを促進した要因になったと考える。その仕組みとして、好循環の形成（関わり、記録、共有、個別ケア、入居者さま本来の姿への再アプローチ）が、介護福祉職としての専門性を発揮しやすい組織文化の醸成につながった。また、自らの関わりが入居者さまの生活の変化につながることを実感することで、専門職としてのやりがいや介護の価値を再認識し、主体的な実践へのモチベーション向上にも寄与した。

一方で、記録の「量」の増加に対し、「質」のばらつきは今後に向けた課題として残る。記録がケアプランや日々の関わりに還元されるまでのプロセスをさらに標準化し、精度を高めていくことが次のステップである。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

ふれあいケア（2020. 12 月 発行：全国社会福祉協議会）

特集：わかる介護記録をかけていますか？ 6—29 頁

《8. 提案と発信》

生産性向上や ICT の活用など業務効率化をすすめるなかで、そこで捻出された時間をどのように入居者さまへ還元していくのか求められます。特養の生活の場における人間本来の欲求としては親和欲求が主であり、人だからこそ果たせる役割があります。だからこそ日常生活の中にある些細な関わりから、その方らしい暮らしを支援するヒントを捉え、入居者さま理解を深めることが、結果として個別ケアの質と QOL の向上につながると考えます。